

主 題：ユダの頌栄 ②  
 聖書箇所：ユダの手紙 24節

ユダはこの手紙を主なる神への頌栄をもって締め括っています。ユダは主の恵みをいつも覚え、また、救ってくださった主のことをよく知っていたということが、この手紙の中から私たちは見て取ることができました。それゆえに、彼は主を崇めながら誉め称えながら日々を過ごしていました。もちろん、私たちクリスチャンは例外なくそのように生きていくことができるわけで、ここにおられる信仰者であるあなたもそのように歩むことを主は望んでおられることは皆さんは十分にご存じです。そして、実際にそのように歩んでいる人はたくさんいます。よく皆さんがご存じの「罪とがを赦され」という曲が聖歌にあります。ファニー・クロスビーという盲目の姉妹が書いたすばらしい賛美です。こんな歌詞です。「罪とがを赦され、神の子となりたる わが霊の喜び、比べ得るものなし … 主のものとせられし、我が身こそ幸なれ 感謝なき日はなく、賛美なき夜はなし … 」と、この歌詞を見ると明らかに彼女は神の恵み、救いに感謝しながら歩んでいたことは言うまでもありません。繰り返しのところは「日もすがらあかしせん、夜もすがら主を誉めん み救いは妙なり、み救いは奇しと」、一日中、一晩中、主をあかしし誉め称える、ことばに表わせないほどすばらしい「み救いは奇しと」、人知で測り知れないほどすばらしい、どのように表現すればいいのかわからないほどこの救いはすばらしいと、それが彼女の書いた詩の中に表わされています。

だから、パウロだけでなかった、ペテロだけではなかった、すべての信仰者がこのように生きることが出来るし、このように生きることを神はあなたに望んでおられるのです。なぜ、彼女はこのような歩みをする事ができたのか？彼女が書いた「罪とがを赦され」の歌詞の中にそのヒントがあるように思えてなりません。日本語の歌詞には出て来ないのですが、このような歌詞があります。「完全な服従、全き喜び、再臨の光景が今私の視界を満たしている」と。幼くして彼女は盲目を経験するのです。偽医師によって彼女はそうなったのです。光の全くない世界で彼女はこんな証をしました。「今、自分が見ているのはイエス・キリストの再臨の光景だ」と。それが自分の視界のすべてを満たしていると言います。どれほど彼女は神の約束に立って歩んでいたのか？イエスが帰って来られるという約束を彼女は信じてどんなにその日を待ち望んでいたのか？ここに秘訣があります。みことばを通して私たちが学んでいるように、信仰者として生きていくためにしっかりとみことばの土台に立たなければならないのです。そのように歩んだ人たちに共通していることは、確かに、彼らは感謝をもって喜びをもって、主にお会いすることを期待しながら与えられた一日一日を過ごしていたことです。

主を賛美しながら誉め称えながら歩み続けることは可能だということです。そのように私たちは歩んで行くことができるのです。時代や場所や抱えている問題や置かれている状況に関係なく、喜びをもって救われたことを感謝しながら、主イエス・キリストとともに歩めることを喜び、この主を誇りながら日々を生きることができると。私たちの信仰生活はそのようでしょうか？感謝をもって喜びをもって日々歩んでいるかどうか？です。

実際にそのように歩んでいたこのユダが、主なる神が誉め称えられるその二つの理由を記しているのですが、それをしっかりとあなたの心に刻むことです。彼と同じように歩むためにはこのすばらしい真理をしっかりと覚えることが必要です。私たちが24節から学んだ一つ目の約束は「神はあなたをつまずかないように守ることができる」ということでした。

☆主が誉め称えられる理由

A. 主のみわざのゆえに 24節

1. 救い 1) 二つの約束 = (1) 約束は必ず守られる (2) どんなことがあっても約束を実現される ⇒

(a) つまずかないように守ることができる

あなたが間違った教えに従っていかないように、背教からの守りであるということです。そのように見て来ました。主イエス・キリストの救いに与った人がその信仰を捨てて他の信仰に走っていくなどということは絶対に有り得ないのです。つまり、言い方を変えるなら、まさにこの教えは、一度救いに与った者、神の救いに与った者は、絶対にその救いを失うことがないということです。というのは、神が与えてくださる救いは、その人に一時的ないのちではなく、永遠のいのちをもたらすものだからです。神がくださる救いは、信じる人に永遠のいのちを与えてくれるのです。永遠のいのちをいただくという

ことは、救いに与った人は絶対に罪のさばきを受けることがないということです。もうさばきから全く無縁の存在になったということです。

また、その救いが永遠であるということは、その救いを失ってしまうことが絶対にないということです。この救いをくださった神がどんな方かを覚えてください。この方は「永遠のいのちの源」です。ゆえに、この方は永遠に存在されているお方です。そして、為されることは常に完全なことです。そんな神が与えてくださった救い、それを失うことは絶対にない、「救いの永遠堅持」は神が教えてくださる真理です。あなたの救いは絶対に無くならないのです。あなたが救いを失うことはないのです。

これが神が教えてくださったことです。それなら、私たち信仰者は「もしかすると、私は救いを失ってしまうのではないか」とビクビクしながら生きるのではないということです。却って、私たちは神のことばがこのように教えていると、その神のことばに立って歩むことです。ユダは私たちにこれは神の約束だということをはっきりとあなたが知るために、そのことを強調しています。ですから、24節を見ると「できる」ということが2回記されています。原語では1回しか出て来ませんが、分かり易く、「あなたがたを、つまづかないように守ることができ、…栄光の御前に立たせることのできる方に、」と書かれています。

こうして、このことは神だけにできること、そして、神は約束されたことを必ず為されるということ強調するのです。もし、イエス・キリストを信じていると言うなら、全く別のものを信じているとか、イエスを信じていると言いながらこの世の人と同じような歩みを継続して習慣的に行っているとするなら、その人は元々救いに与っていなかった可能性が高いということです。ヨハネの手紙第一2：19に「彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。」とあります。なぜなら、クリスチャンはクリスチャン、兄弟姉妹と交わることを楽しみにしているからです。私たちは一週間の務めを終えて、こうして週の初めの日に集まったときにやっとほっとできませんか？私たちは祈りの課題を共有し合うことができます。みことばを通してともに神を見上げることができます。励まし合うことができます。慰め合うことができます。ときには、諫め合うこともできるでしょう。こうして、私たちがより神に喜ばれるものと成長するために、そのようなことを提供してくれる場所です。ですから、クリスチャンはこうして兄弟姉妹たちとの交わりを楽しみにしているし、それを喜んでいます。もちろん、交わりをしているからその人は救われるということではありません。救われている人の特徴のひとつはこのような兄弟姉妹との交わりを楽しみにし、それを喜ぶのです。

先に見たIヨハネ2：19は「…もし私たちの仲間であったのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためなのです。」と続きます。彼らは交わりから出て行ったのです。なぜなら、クリスチャンたち、兄弟姉妹たちとの交わりよりも、この世の交わりの方が魅力的だったのです。それによって心がいったいどこにあるのか？心が何によって支配されているのかが明らかになるのです。

ユダはこうして神から与えられたすばらしい神からの救いに与ったあなたは、その救いから漏れること、救いを失ってしまうことは絶対にないと言うのです。

#### (b) 栄光の御前に立たせる

二つ目の約束は24節の後半に書かれています。「…傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、」、「栄光の御前に立たせる」とあります。これは私たちクリスチャンが主にお会いするときのことを教えています。「栄光の御前に」ということばは原語では「ご自身の栄光の御前に」と「ご自身」という代名詞が付いています。だれの栄光なのかを明確にしているのです。神ご自身の栄光であると、しかも、その「御前に」とは「その面前で」ということです。神の栄光あるその御座に私たちが立つということです。その光景を思うときに私たちはわくわくします。少し恐ろしいかもしれません。すべてのことをご存じである神の御前です。恐ろしいと思うのは、私たちのこの地上での生活が神を悲しませることが多く失望させることが多いことを知っているからです。

でも、このみことばが教えていることは「あなたは栄光ある聖い正しい神の前に立つ」ということです。私たち信仰者に与えられている祝福をユダは記してくれていますが、その前に、神の前に立つというのはクリスチャンだけのことではありませんね。主イエス・キリストを知らない人たちも、神の敵として生きている人たちも同じように神の前に立ちます。イエスはこう言われました。ヨハネ5：29「善を行つた者は、よみがえっていのちを受け、悪を行つた者は、よみがえってさばきを受けるのです。」と。どちらにしろ、神の前に立つのです。神の前に立って神から祝福をいただくのか？永遠の滅びに至るのか？永遠のさばきを受けるのか？天国なのか地獄なのか？です。ですから、すべて人が神の前に立つのです。

でも、この24節が言っているのは間違いなくクリスチャンたちのことだと分かります。なぜなら、ここに立つすべての人は「大きな喜びをもって立つ」と書かれているからです。私たちはこの聖い正しいすべてにおいて完全なる神の前に喜びをもって立つのです。この方は私たちを迎えてくださるのです。

歓迎してくださるのです。

大いなる喜びをもって私たちを愛してくださり、私たちを選んでくださり、救いへと導いてくださり、日々の生活において私たちを支え続けてくださり、必要なものを与え続けてくださる、そして、このような素晴らしいところへといつかは招いてくださるのです。素晴らしい偉大な神にお会いすることができるのです。その光景をユダは描いているのです。

もう一つ見ていただきたいのは、「…傷のない者として、」ということばです。「傷のない」は新約聖書に7回出て来ますが、「欠点がない、無傷の」という意味です。このことばは神にささげるいけにえに使われることばです。皆さんもよくご存じのように、神にいけにえをささげるときにどのようないけにえでもよかったわけではありません。そのいけにえは傷や欠点があってはならなかった。たとえば、家畜を飼っているなら、もう病気だし死にかけているから…というのでは神はお喜びになりません。申命記の17：1「悪性の欠陥のある牛や羊を、あなたの神、【主】にいけにえとしてささげてはならない。それは、あなたの神、【主】の忌みきらわれるものだからである。」、神の前にふさわしいいけにえを、最高のものを持っていきなさいと言います。神が喜んで受け入れてくださるものを私たちは持っていくのです。ですから、このことばはそのようないけにえに対して用いられるのです。

同時に、このことばは主イエス・キリストに対しても用いられます。ペテロはIペテロ1：19で「傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」と記しています。イエス・キリストは傷もなく汚れもなかったから神の前に立つことができたのです。つまり、罪が全くないお方だったということです。人類の歴史の中で、生まれながらに神の前に立つことができたお方はただ一人、イエス・キリストだけです。

私たちは主イエス・キリストを信じてこの救いに与ったときに、この聖い正しい神の前に立つ権利をいただきました。神は私たちをいつも歓迎してくださっています。でも、だからと言って、私たちから罪が完全に無くなったわけではありません。今、この地上での信仰生活において私たちが日々経験していることは罪との葛藤です。しかし、この箇所が私たちに教えることは、その葛藤もいつまでも続くものではなく終わりを迎える日が来るということです。いつその日が来るのか？栄光のからだをいただくときです。私たちはこの肉を脱ぎ捨てて栄光のからだをいただくのです。私たちはもう神を悲しませることはなくなるのです。神を失望させることがなくなる、神のみこころに反することがなくなるのです。だから、私たちはその日を待っているのです。その栄光のからだをいただく日を待っているのです。

あなたはどうですか？その日は来るのです。その日に私たちは変えられるのです。私たちはイエスにお会いしたときに、イエス・キリストに似たものになると教えられています。Iヨハネ3：2「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」、傷も汚れもなかったイエスと同じように、栄光のからだをいただいて神の前に立つことができるのです。

ユダの手紙を見ると、それが「できる」とユダは記しています。あなたの信仰が無くならないように神はあなたを守ってくれる、それは神にはできるのです。そして、あなたが罪から完全に解放されて栄光のからだをいただいて神の前に喜びを持って立つこと、それは神にはできるのです。それが神の約束だと、そのようにユダは教えるのです。ですから、信仰者の皆さん、あなたは救われて天国が約束されているが、それだけではない。この地上での歩みにおいて神はあなたをしっかりと守ってくれます。そして、この約束が成就するのが天です。この罪のからだから完全に解放されるのです。

どんなに決心しても、どんなに努力しても、私たちは罪によって失望し続けて来ましたし、今も、され続けています。でも、その状態から完全に解放されるのです。少なくとも、私たちはその日を待望するべきです。その日が来ることを待ち望むことです。パウロもペテロも、信仰の勇者たちも待っていました。この地上での大変な苦しみからの解放を待っていたのではない。彼らが待っていたのは、イエスにお会いしてもう罪を犯すことがない完全なからだをいただくその日です。そして、私たちはそのように生きていくことができるし、それを神は期待しておられるのです。

こうして素晴らしい約束を私たちは見ているのですが、実は、この約束においても、私たちが覚えることは、これらはすべて神のみわざだということです。あなたがこの救いに与っているのはすべて神の賜物だとすでに見ました。神があなたにこの救いをプレゼントしてくださったのです。では、いつ神はそのことを決められたのでしょうか？世界を造る前からだと言います。エペソ1：4「すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」と。つまり、あなたは罪のない者として傷のない者として、この神の前に立つことができる、そのように決められたのはこの世界が誕生する前からです。

ですから、今、私たちはユダの約束を見ているのですが、これも実は神が突然決めたのではなく、世

界を造る前から決められていたということです。そして、神が選んでくださったゆえに神があなたを救ってくださった目的というのは、あなたを聖く傷なく非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためなのです。コロサイ 1 : 22 に記されている通りです。「今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。」、そのために神はあなたを救ってくださったのです。ですから、信仰者の皆さん、神のご臨在のもとにあなたは立ちます。感謝なことに、完全な者として、罪から完全に解放された者として赦されたということです。それはもう信じたときに起こりました。肉のからだから完全に解放されて栄光のからだをいただいた者として、主イエス・キリストと同じように、傷も汚れもない者として、罪のない者として、私たちはこの方の前に立つことができるのです。そして、そのときに私たちは大きな喜びをもってこの方の前に立つのです。

この 24 節はこうして私たち信仰者に与えられたすばらしい約束を教えています。その日はもう間もなくやって来る、もうすぐ私たちはこの主にお会いできると。でも、悲しむべきことは、イエス・キリストに逆らっている者たちはこの祝福をいただくことがないということです。詩篇 1 : 5 にはこうあります。「それゆえ、悪者は、さばきの中に立ちおおせず、罪人は、正しい者のつどいに立てない。」と。この祝福の中に彼らの居場所はないということです。この祝福に彼らは招き入れられない、彼らは歓迎されないと言います。なぜなら、汚れているから、罪の赦しをいただいていないからです。そのことを考えるとき、私たちにはまだまだしなければいけないことがあると気付かされます。家族のために、愛する者たちのためにこの救いを語り続けて行くことです。

ユダは 24 節にこうして二つの約束を記しました。神は必ずこの約束を果たされると言いました。ユダが感謝をもって歩み続けたそのカギをここに見るのです。ですから、私たちに必要なことは、このような約束を神はくださった、その日が来るということをしかりと心に刻んで与えられた日を生きることです。今日イエスにお会いするかもしれない、この主の前に私たちは立ち主の御顔を拝することができるのです。すばらしい約束を記してくれています。この約束を信仰者である私たちひとり一人はこの心にしかり刻むことが必要です。私たちはこの地上にあって、この祝福をくださった神を称えながら、この神のすばらしさを現わしながら生きるからです。神がくださったすばらしい救い、すばらしい祝福はすべて神ご自身が一方的にあなたにくださったものです。感謝しなければおかしいでしょう。

すばらしい祝福があるのですが、ある人たちはこのような約束を聞いて「本当に救われた者は救いを失うことがない、しかも、罪から解放された者として聖なる神の前に必ず立つことができる、もしそうなら、残った地上の人生、行く所も決まったし天国の切符をもらったのだから自分の好きなように生きていいではないか、好きなように生きて楽しんだらいいではないか」と、そのように考える人たちがいることも知っています。それは神の前に正しくないということは皆さんもご存じでしょう。パウロもこのように言います。ローマ 6 : 1 「それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。」、続く 2 節には「絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。」とあります。罪を犯しても神がそれを赦してくださり、それによって神の栄光が現わされるのなら、我々は罪を犯し続けたらどうか？そうすればもっと神の栄光が現わされるのではないか？そんなことはできない、そんなことは有り得ないということです。なぜなら、そのように考える人たちが考えていることは天国に入るために切符をもらったかどうかということ、天国に入れる保証をもらったかどうかだからです。これはまさにご利益宗教です。それをもらうために信じたに過ぎないのです。

聖書が教えている救いはそうではありません。聖書が教える救いとは神からのプレゼントです。このように考える人たちの問題は救いのことがよく分かっていないということです。「救いとは生き方が変わるもの」です。良い人になるということではありません。みことばを聞いて良い人になりましょう、みことばを聞いてそのように生きることによって何とか天国に入れてもらえる…。そうではありません。良い人は世の中にいっぱいいます。救いというのは神に従う人を造るのです。あなたや私を神に従う者へと造り変えるのです。かつての私たちは神に逆らう者でした。でも、そんな私たちが神は神に従う者として造り変えてくださった。ですから、私たちがイエスを信じると決心した時のその決心を思い出してください。何を信じましたか？ただ「イエスを信じると言えば天国への切符がもらえる？それでは信じましょう。」、ここには大きな問題があります。

私たちがイエス・キリストを信じた時に、私たちはイエス・キリストを自分自身の主人として受け入れて従っていく決心をしました。なぜなら、人間には二人の主人しかいないからです。サタンか神か、どちらかに従っているのです。ですから、私たちは間違った主人に従って来た者としてその罪を悔い改めて、正しい主人に従って生きましょう、正しい真の神に従っていきましょと、その決心をしたわけです。私たちがイエスを主人として受け入れたということは、この方が神であり、この方は救い主であ

り、この方はすべての主権者であると、それを認めたのです。神ゆえにこの方に従いましょう、この方がすべての主権者であるゆえにこの方に従っていきましょと、そうして私たちはこのイエス・キリストの救いに与るのです。

ですから、聖書の中で、人が本当に救いに与っているかどうかは、その人が何を言うか何を知っているかということではなくて、その人の実によって見分けることができると教えたのはそういうことです。神のくださる救いはその人を造り変えるからです。神によって救われた人は、「この人は確かに救われている」という確信を本人だけでなく周りの人たちにももたらすのです。ヨハネはそのことを教えてくれています。Ⅰヨハネ2：3に「もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。」とあります。ここに「神を知っている」と書かれています。これは「知的に知っている」ということではなく「個人的に知っている」ということです。つまり、神を信じて救いに与っているということです。「神を知っていることがわかります。」というの「それによって」神を信じていることが分かるということです。神を知っているかどうか、知っていることの証拠は「神の命令を守るなら」とあります。この「守る」という動詞は現在形です。継続して守り続けようとするのです。

「でも、私は守ろうとしているけれど失敗してしまいます。自分は救われているのでしょうか？」と言います。その人の心の中には神の命令を守っていきたい、神の教えを守っていきたいと、そのような願いがあるのです。この3節が教えていることは「もしあなたが神の命令を継続して守っていきこうとするなら、そのように歩もうとしているなら、それによってあなたは神を知っていることが分かる。」です。つまり、それこそが救われていることの証拠だと言っているのです。だから、救われた者たちは「神の命令に従っていきたい」と願ってそのように生きている者たちだと記されているのです。

続く4節には「神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。」と書かれています。この「言いながら」という動詞も現在形です。口でずっと言い続けているということです。「自分は救われています」と。この人が救われていない証拠はどこにあるのか？「守らない」とあります。この動詞も同じように現在形です。どんなに口で自分は神を愛している、信じていると言っているても、その人が神の命令に継続して従っていきこうとしていないなら、それが彼の願いでなければ、その人は嘘つきだということです。「真理はその人のうちにありません」とあり、これは救われていないことを意味しています。まとめるとこのように言えます。「神の命令への従順というのは救われていることの証拠、神の命令への不従順はその人が救われていないことの証拠である」と。

ですから、救いに与った人たちは神の命令に失敗しながらでも従っていきこうとします。神が教えてくださること、神が命じておられること、それらを聞いた時に「主よ、私はそのように生きていきたいです」とそのように願って、失敗したらその罪を告白しながら命令に従っていきこうとするのです。このように生まれながらに持っていない願いを持っているということは、その人が救いに与っていることを表わします。なぜなら、「救いとは？」、ペテロがこのように言っています。Ⅱペテロ1：4「その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもとから滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。」と。主イエス・キリストを信じて救いに与った人は、ここにあるように「神のご性質にあずかる者」となったのです。だから、その人はその瞬間からイエスに似た者になっていく者になるというそのプロセスが始まったのです。なぜなら、その人のうちには神のご性質が与えられているからです。ゆえに、その人はイエスに似た者に変えられ、そして、最終的に傷も汚れもない—神になるということではありません—イエスに似た者に変えられるのです。皆さん、つながって来ませんか？なぜ、神が私たちがイエスに似た者に変えていきこうとされるのか？それは私たちのうちに神のご性質が与えられたからです。救いによって、そのときから主に似た者に変えられていく「変態」の働きを経験するのです。そして、最終的に私たちは栄光のからだをいただいて、大喜びをもって私たちはこの神の御座に立たせていただくのです。そして、神は私たちが迎え入れてくださるのです。

私たちが先ず救いを考えるとき、こうして神のご性質が与えられていること、同時に、救いをいただいた人たちは主に仕える歩みを始めようとするのです。ヘブル9：14には「まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におさげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。」とあります。この救いというのは私たちが生まれ変わらせるのですが、私たちが「主に仕える者」として生まれ変わらせてくださるのです。だから、私たちは主に従っていきこうとするのです。主が喜ばれることをしていこうとするのです。まさに、主人を愛する奴隷のようです。奴隷は「どうすれば自分の愛する主人を喜ばすことができるか」と、そのことを考えて仕えていきます。まさに、我々もそのような人に変えられ、我々の愛する主人であるこの神を喜ばせるために何をしたら良いのかと、そのことを考えながら生きていくのです。そういう人に造り変えてくれるのが救いなのです。このようなみわざを神ご自身が為されます。また、パウロもこう言っ

ています。ローマ6：4「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」と。イエスが死んでよみがえられたように、私たちもかつて神に逆らって来た自分は死んで、そして、イエスがよみがえったように、イエスに従う新しい自分に生き返ったということです。これが「救い」なのです。神に仕える者としての新しい人生が始まっただけでなく、私たちはこの神の救いによって新しい歩みをする者として、新しい人生を歩むその歩みを始めたと言うのです。

ウィリアム・バークレーという神学者がこの「新生」についてこのように言います。「キリスト者の新生は義への新生である。この新生にあって自我や自分に絡み付いている罪や悪い習慣から聖められるのである。彼らには罪から解放され義によって歩むことのできる力が与えられるのである。」と。私たちは「神の栄光のために」という新しい目標をもって、真の神に仕えてこの方に従って生きようとするのです。ただ、そういう願いを持つだけでなく、その歩みを実践するための力も与えられていると言います。そうでなければ、この新しい歩みというのは私たちにとって重荷になります。できないことを命じられたのだから、できないことをやりなさいと言われたのだから…。でもそうではありません。神は新しい歩みができると言われ、その歩みを為していくための力も備えてくれました。恵みが日々与えられているのです。

皆さん、私たち信仰者、このキリストの救いに与った者たちは、神が喜ばれる新しい生き方を実践できるのです。この世の人たちが絶対に歩むことのできない人生を私たちは生きることができるのです。そのような人に神は私たちを造り変えてくださったのです。必要なことは「神の助け」です。私たちが覚えるべきことは、この救いを見た時にすべては神のみわざであったことを見て来ました。自分の努力によって救いを得たのではありません。神が一方的にくださったものでした。そして、この救いに与った私たちは神の助けをいただきながら生きていくわけですが、でも皆さん、あなたは何もしないでただそこに座っているだけで信仰の成長が得られ神の栄光を現わしていくのかというと、そうではないのです。

実は、あなたにも信仰者としての責任があるということです。Ⅰヨハネ3：2、3をご覧ください。「：2愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。：3キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」とあります。イエスにお会いするその日が近いのだとしっかり覚えている人は主の前を正しく生きて行こうとするわけですが、もっと言えば、主が歩まれたように、その模範に倣って歩んで行こうとすることです。主が清くあるように、自分もそのように歩んで行こうとすることです。

私たちの責任は、神が明らかにしてくださった神のみこころに従うことです。神がこう生きなさいと言われた命令に従うことなのです。これが神が喜ばれることだというその教えを聞いた時にそれに従うことです。その決心をあなたがイエスを信じた時にしたわけでしょう？「従っていきます」と。信仰生活において神が要求されているのは「わたしの言うことに従いなさい」です。

だから、みことばを見る時に「みことばに従って歩み続けていきなさい」という命令が繰り返されています。パウロがこのように言っています。これはパウロの最後の遺言と言われるみことばです。Ⅱテモテ4：7「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」、彼はこのようには言わなかったのです。「私は神の恵みによって何もしなかったし何もできなかったけれども、こうして神は日々の生活を守ってくださって、そして、今私を救いへと天へと導いてくださった。」と。彼は勇敢に戦ったのです。神の真理を曲げることなく勇敢に戦ったのです。神の教えに従おうとして彼は生きたのです。この世のいろんな摩擦を経験しても彼はその中で勇敢に戦った。そして、自分の走るべき道のり、しなければならぬこと、神が命じておられること、それらを彼は精いっぱい守ろうとしました。信仰を守り通したと言います。お気付きになるでしょうか？パウロには大変な信仰の歩みでした。もちろん、パウロがそのことを教えてくれています。

つまり、すべては神の恵みによって今私たちはこの祝福に与っています。でも、あなたが神のみことばに従って生きていこうとするときまで、あなたの信仰の成長は見られないし、あなたがイエスに似た者に変えられていくというプロセスをあなたは止めているのです。神のみこころに従わないということは罪なのです。神が命じることをやらないというのは罪なのです。罪は神の働きを妨げるのです。だから神の命令に従おうとする時に神の働きが為されるのです。そして、あなたをキリストに似た者へと変えていかれるのです。だから、私たち信仰者に者にとって、みことばに従っていくということはそういう意味で大切なのです。

長い信仰生活の中で、振り返ってみて自分の信仰が余り成長していないなとも思われたとしたら、自分に問いかけてみてください。「自分は本当に神のみことばを聞いてそれに従おうとして来たか？そのことを願って神の助けをいただきながらそのように生きたのか？」と。忘れないようにみことばをどこ

かに記すなどいろいろな方策を取りながらみことばを覚え、みことばの教えに従っていこうと、そのような努力を為したかどうかです。そうしなければ我々の信仰は成長しないのです。成長しないことを神のせいにするにはできないのです。神はどのように生きるべきなのかを教えてください。それをしなかった怠慢の罪は私たちの問題です。

多くの信仰者たちがこのパウロと同じように信仰の馳せ場を走り切りました。この地上にあって信仰者は為すべきことをしっかり成し遂げていきました。エリザ・ヒューイトという一人の姉妹がいます。この人はアメリカのフィラデルフィアで教師として務めていた人です。ところが、ある時怪我をするわけです。後に彼女の親族が言ったのは、彼女は教えていた時に子どものだれかが、恐らくイタズラだったのでしょう。何かの板をもって彼女の背中を強く叩いたのです。それによって脊髄を痛めてしまってその後かなり長期に亘って彼女は仕事ができず寝たきりの状態でした。「どうして!？」と神に愚痴を言うこともできたけれども、彼女はそんなことをしないで、その間、英文学の本を読んだのです。そして、賛美をしてたくさん詩を書きました。その後、彼女は職場に復帰するのですが、その後の人生はその痛みとの戦いでした。彼女の中にあつた願ひは、神からいただいた自分の賜物を用いて日曜学校で子どもたちを教えていましたから、確かに身体的にはハンディがあつたでしょう、でも、彼女はその主が与えてくださった賜物を生かして主に仕えていくことでした。日曜学校の教師として働くのです。ある時には彼女は二百人以上の子どもたちを教えていたと言います。その彼女が書いた讚美歌も日本語になっています。聖歌の638番「やがて天にて」という曲です。お聞きになったことがあると思います。「御国に住まいを備えたまえる 主イエスの恵みを誉めよ称えよ、やがて天にて喜び楽しまん 君にまみえて勝ち歌を歌わん」と、このように訳されています。実は、これは彼女が記した意味と少し違った点があります。これを訳すのは大変なわざだつたと思いますが、彼女はこんなことを記しました。「主イエスの驚くべき愛を賛美する 主のあわれみと恵みを誉め歌う 主が私たちのために備えてくださった輝く祝された天の住まいで 私たちみんなが天国に着いたとき それはなんと喜びの日なのだろう 私たちみんながイエスとお会いする時 私たちは勝利を歌い勝利を叫ぶだろう。」と、3番には「それゆえ、私たちは誠実さと忠実さと信頼をもって日々主に仕えよう 栄光の主をちらりとお見かけするだけで人生の労苦が報われる」と、すごいことを書いたと思いませんか？

どんな信仰者として生きたとしても、この地上でどんな労苦を味わつたとしても、どんなに迫害されたとしても、天に行つてイエスの御姿を少しだけでも見たときに、それらはすべては虚しくなかつた。なぜなら、イエスが何をしてくださつたのかを覚える時に、私たちができることなど限られているからです、皆さん。でも、その中で神が私たちに望んでおられることは、主の与えてくださった賜物をもって主に仕えることです。それがあなたのできる感謝です。そのように生きていますか？

感謝をしているなら、あなたに神が与えてくださったその賜物を使うことです。私たちはみな働き人です。あなたが働くことによってみな信仰が成長するのです。それが神が私たちに命じておられることです。多くの人たちがそのようにして生きたのです。神の栄光を現わし、神に喜ばれ、神への感謝を表わしました。

最初に話したあのファニー・クロスビーは幼い頃に光を失いました。でも、彼女はその後すぐに書いた詩の中で視力を失つたことを神に感謝し神を称えています。8000の曲を書いたと言われています。彼女のお墓はアメリカのコネチカット州ポジポートにあり、その墓石にはこのように書かれています。

「彼女は自分のできることをした」と。これは聖書のみことばから取つたものです。イエスがベタニヤでシモンという人の家にいました。彼は病気を治してもらいました。その時に、ある一人の女性が大変高価なナルド油の石膏の壺を持って来てイエスの足をぬぐつたのです。それを見ていた人々は「なんて無駄のことをするのだ。300デナリ以上で売れて貧しい人に施すことができたのに。」と言ってその女を責めました。この女はあのマルタの妹のマリアです。同じベタニヤに住んでいました。マリヤとマルタと、そしてラザロです。そのときイエスはこう言われました。「:6…そのままにしておきなさい。なぜこの人を困らせるのですか。わたしのために、りっぱなことをしてくれたのです。:7 貧しい人たちは、いつもあなたがたといっしょにいます。それで、あなたがたがしたいときは、いつでも彼らに良いことをしてやれます。しかし、わたしは、いつもあなたがたといっしょにいるわけではありません。:8 この女は、自分にできることをしたのです。埋葬の用意にと、わたしのからだに、前もって油を塗ってくれたのです。」(マルコ14:6-8)と。彼女は主への感謝を表わしたのです。人々が何と言おうと彼女はそうして自分の感謝を表わしたのです。主はそれを喜ばれました。

あなたは信仰者としてどのようにこの地上での生活を終わりますか？神に対するかつての愛は冷え切っていませんか？主に従うと決心したのにいつの間にかそれを忘れてしまって自分のために生きていませんか？何のために神は私を救ってくださったのか？何のために神は私を生かして下さっているのか？そして、私にはどんな責任があるのか？そのことを覚えることです。そして、正しいことは、主に

従うことです。主のみことばに従っていくのです。そして、あなたに与えられた賜物を使って主に仕えていくのです。喜んで積極的に、自ら進んで犠牲的に、そして、あなたの主に対する感謝を愛を現わすことができるのです。どのようにし私たちはこの地上の生活を送るのか、一人ひとりが決めなければなりません。信仰の勇者たちはこのようにして歩み、このように生きたのです。そのように終わりたいものです。今日からどのように生きるのか？それはあなた自身が決めなければいけません。主のみことばが教えるように生きて、しっかりと私たちの感謝を、愛を主に表わし続けていきましょう。